

特集

あめの恵みを活かした雨水対策



ゲリラ豪雨の脅威

突発的な局地的豪雨や集中豪



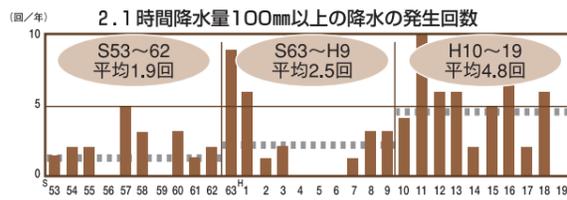
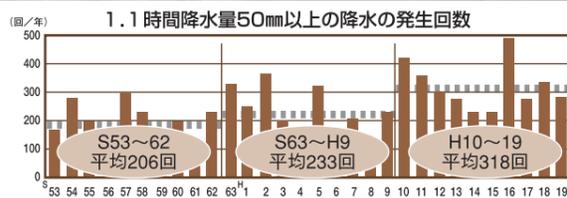
大雨で水があふれる追田川

雨による災害がたびたび報告されています。全国で、1時間降水量の発生回数が昭和53年の観測時より、50mm以上は1.5倍、100mm以上は2.5倍も増えています。平成12年に起こった東海豪雨の当時と比べて、大雨に関する情報が手に入りやすくなりました。しかし、完全な予測は困難です。昨年8月末に発生した局

地的豪雨では、安城市でも1時間降水量最大77mm、総雨量226mmを記録。床上浸水15戸、床上浸水72戸の被害が出ました。



昭和52年から減少した水田・畑 (1113ヘクタール)
 図面：細密数値情報(土地利用)より作成
 数値：愛知農林水産統計年報(愛知農林統計協会)



雨水の地下に浸透する面積の減少

安城市は、年々農地が減少し、都市化が進行しています。市街地化することで保水機能を持つ農地が舗装や建物で覆われ、その結果、雨水は一気に側溝から河川へと流れ込むようになり、流量も増大します。こうした雨水の地下浸透面の減少により、河川へ流入する量が増大し、排水路や河川の氾濫の危険性が増大しています。

今、求められる雨水対策

今までは、河川・調整池や排水路の整備を進めてきましたが、近年頻発している豪雨に対しては、行政が実施する雨水対策に限界があります。一方、農地・緑地が少なくなることで、ヒートアイランド現象、地下水位の低下による河川流量の減少、さらには水辺環境の変化など水循環に関する問題が発生しています。これまで「あめを速やかに流す」ことを目的に河川整備や排

あめを速やかに流す

河川整備や排水路整備



発想の転換

あめの恵みを活かす

市民・事業者・行政で雨を活用する



貯めて使う

浸透させる

水路整備をしてきました。しかし、今後は、発想の転換をして「あめの恵みを活かす」ことを念頭におきます。環境首都を目指す安城市としては、雨を水資源として活用することで、より災害に強く、水環境にやさしいまちづくりを推進していきます。そのための指針として現在「安城市雨水マスタープラン」

以下雨水マスタープラン」の策定を進めています。

あめの恵みを活かす安城

「あめの恵みを活かす安城」を基本理念とした雨水マスタープランでは、あめの恵みに感謝し活用する「水資源」と、あめに学び備える「防災」の2つの視点を

取り入れることで、雨水対策に相乗効果をもたらそうと考えています。また、水害に強い快適なまちにするため、市民・事業者・行政が協働して雨水対策を推進していきます。

岡▼土木課
 (☎71)2239)

① 雨水対策

- 流す↓計画水準まで完了していない河川や排水路を整備
- 貯める・浸透させる↓貯留・浸透により、河川や排水路への流出量を減少

② 水資源

- 貯める・使う↓貯めた雨水を、庭木の散水などに利用
- 浸透させる・使う↓浸透させた雨水は、地下水の供給や河川流量維持に貢献

③ 防災

- 学び備える↓水害について学び、自らを守るために準備
- 貯める・使う↓貯めた雨水を、震災などの水不足時に防災用水に活用

